

いちょなみき

No. 68

変わる 大学附属図書館

変わる

特集
Special Section

- 卒業生その人に聞く **花澤 茂さん** ぶどう研究者
- 研究室訪問 **舟橋 弘晃** 環境生命科学研究科(農) 教授
「岡大農場」スイーツ開発
- きりり岡大生 **角山 怜祐** 工学部2年
留学生支援ボランティア「WAWA」
- 光合成研究で成果 沈教授が朝日賞受賞
国立六大学の連携強化へ 包括協定を締結
授業改善へ議論白熱 学生FDサミット開催
新理事紹介 門岡裕一氏
- News & Topics 大学の動き／研究・臨床成果



変わる University Libraries

特集
Special Section

変わる 大学附属図書館

「研究書を収集する場」「学生が自習する場所」一。そんな画一的なイメージを抱かれがちだった大学附属図書館。しかし今、その機能やポテンシャルに着目し、さらに機能強化する動きが全国の大学で広がっている。岡山大学でも発信力や教育力を高めようと、さまざまな取り組みを行っており、今後さらに変貌を遂げることが期待される。岡山大学附属図書館の使命と未来図について、担当理事の許南浩企画・総務担当理事に聞いた。

▶担当の許理事に聞く

まず原点から図書館の存在意義について考える必要がある。人類が進歩してきたのは知恵を集積し、効率よくそれを次世代に授けてきたから。当初は「知恵を集積する場」が即ち「学ぶ場」であった。時代が下ると共に機能分化が進み、図書館が前者中心の場になったのは当然としても、IT時代を迎えて今一度原点に立ち戻り、学ぶ場、教育の場としての機能を強化する必要がある。ソフト、ハードの両面から新しい図書館を目指す。

職員の専門性活かす

これまで図書館運営は教員である館長のほかは、図書館職員で担ってきた。もともと多くの教員を運営に関わってもらうために、新年度からは副館長制度を導入する。必要に応じて運営に携わる教員を増やし、現在の運営委員会の在り方も再検討する必要がある。教員自身が図書館を活用し、そこで働く立場で運営をチェックする体制にしていかなければ。また教育との連携を強めるために、教養教育の在り方を考える場には必ず図書館の担当者が参画するようにしていく。

ハード面では、中央図書館本館の改築・改修を計画。資料の収集・保存は重要であるが、それに重点が置かれすぎて教育が後回しになっては大学附属図書館として本末転倒。保存していくべき資料を改めて見直し、学生が集い学べる場所を充実させる必要がある。ネット環境やグループ学習室などは既にあるが、もっと充実させたい。イングリッシュ・カフェのような機能を融合させるなど、さまざまなバターンの学習ができるスペースとして附属図書館を機能強化していきたい。新年度は耐震化工事に着手し、将来的に徐々に理想の姿に変えていく。



Executive Director ▶ HUH, Nam-ho

教育とのリンク再構築を

一言で言えば「旧態依然」とした雰囲気を感じている。本館の建物構造が古く、残念ながら高校生や新入生が訪れたとして「ここで勉強したい」という雰囲気になっていない。個々の図書館職員はサービス面でさまざまな努力をしているが、資料の収集、保管、貸し出しという旧来の図書館機能やイメージが重くのしかかっており、ハード・ソフト両面でやや古い印象を受ける。

資料収集・配布とそれを活かした教育機能を渾然一体化する必要がある。それは図書館単独の力ではできない。教育とのリンクを取り戻し、あるべき姿に戻すことが必要だ。学生が共に学び合うスペースとして最近注目を集めている「ラーニング・コモンズ」を作り、「場」を提供するだけではだめ。場の提供からさらに広げて、収集した資料を「活用」する場を提供しなければ。特に図書館の専門性を活かした教育を行うべきで、ネット時代に求められる情報リテラシーを身に付けさせるために、図書館が必ず必要となる。

こうした役割を実現するには、まずソフト面で職員個々のサービス能力を高め、教育機関で働いている気概を持つことが必要。ソフト面を充実させるには、教育・研究機能に見合った快適なスペースを持った建物にするなどハード面の充実も大切だ。さらに大学外部とリンクすることも求められる。提言を受けると外部の目を運営にも取り入れれば、社会に対してより有効な情報発信をすることにもつながる。

附属図書館に求められる役割を実現するため、今後どのような改革を行うのか。

図書館を利用する学生たちへメッセージを。

大学附属図書館が人類の叡智が詰まった「知の集積地」であるということとを、あらためて考えてほしい。レポートを書くのとネットで検索すれば情報はたくさん出てくるが、こうして簡単に手に入る知識は薄っぺらなものも多い。長い歴史の評価に耐えた「知」が図書館には蓄積されている。現代は情報を評価する力が問われており、大学附属図書館を利用することで楽しみながらその力を身に付けてほしい。図書館は試験勉強の時だけ利用する場所ではない。在学中だからこそ触れられる貴重な資料、そうした資料に触れられる貴重な時間を大事にしてほしい。

資源植物科学研究所分館



史料館 3階・雑誌書庫・図書書庫
開館時間/月～金 9:00～17:00
貸出/研究所外者への貸出不可
蔵書数/185,970冊
貴重資料/Pfeffer文庫 大原漢籍文庫 大原農書文庫等

※蔵書数は2012年5月1日現在

鹿田分館



2階
開館時間/授業期間▶月～金 9:00～21:00 土10:00～17:00
休業期間▶月～金 9:00～17:00 土10:00～17:00
※閉館後も24時間利用可能(無人開館、鹿田地区学生・教職員のみ)
貸出期間/図書・製本雑誌1週間 未製本雑誌1日
貸出冊数/5冊
蔵書数/292,761冊
貴重資料/古医書集成等

中央図書館



本館3階・新館6階
開館時間/授業期間▶月～金 8:40～23:00 土・日 10:00～18:00
休業期間▶月～金 9:00～17:00 土・日 休館
貸出期間/図書2週間 雑誌3日
貸出冊数/10冊
蔵書数/1,654,403冊
貴重資料/池田家文庫 三浦家文書 地方資料 個人文庫等

神崎 浩館長に聞く



館長就任当初、図書館職員の専門力が学生や教員に知られていないという印象を持ち、職員・図書館の活動をもっと知ってもらうためPRに努めてきた。例えば新入生らを対象にしたオリエンテーション。組織として開催していない学部で開催を依頼し、かなりの学部が対応していただいた。リポジトリによる論文公開については、学位論文の全文公開義務化の学長決定に従い、図書館と各研究科事務とが連携して学位申請者からスムーズに掲載許諾を得るシステムを構築し、掲載数が大幅にアップしたし、大学が支援しているプロジェクトに関する論文についても、掲載数の増加が達成できた。これらの取り組みは職員の業績にもつながる。

学生の中には図書館を利用していても機能を十分に活用した使い方ができていない場合がある。また図書館として統計データを毎年出していたが、図書館利用率の平均値だけでは利用の実態は見えない。データを精査したところ、実際にはヘビーユーザーがいる一方で利用0回という学生もいた。図書館改革というヘビーユーザーに意見を求めがちだが、利用0回の学生にこそ目を向け「どうしたら利用ようになるか」を考えていく必要がある。そのため、教員が図書館を利用する手法を学生にうまく伝えることが大事だ。

私は学生にレポートなどの課題を出す時、参考文献を図書館で調べさせている。インターネットと異なり、図書館は目的の本周辺に関連資料があるのが利点。関連資料にも目を向けることを繰り返せば、たとえ目的の本がない時でも資料の調べ方そのものが身に付く。「図書館に行く意味」を理解させ、図書館を使う習慣をつけることが大切。図書館職員にも司書資格を持つプロとしての対応を期待したい。

▼4月に新館長就任

沖 陽子・環境生命科学研究科教授



図書館は「知のサービス業」であるべき。従来のイメージである個人が静かに学ぶスペース、グループ学習やディベートなど活気あふれる学習スペース、訪れたい楽しさや心地よさを生むスペースが、バランス良く混在する図書館にしていきたい。2013年度から耐震化工事などが始まるので、改革には良いタイミングになると思う。

学生や教職員だけでなく、地域の人や名誉教授、卒業した同窓生が気軽に立ち寄れる場にするのが理想。“知”の満足感を誰もが得られる場であることを広く発信し、地域の図書館なども連携を拡充していきたい。

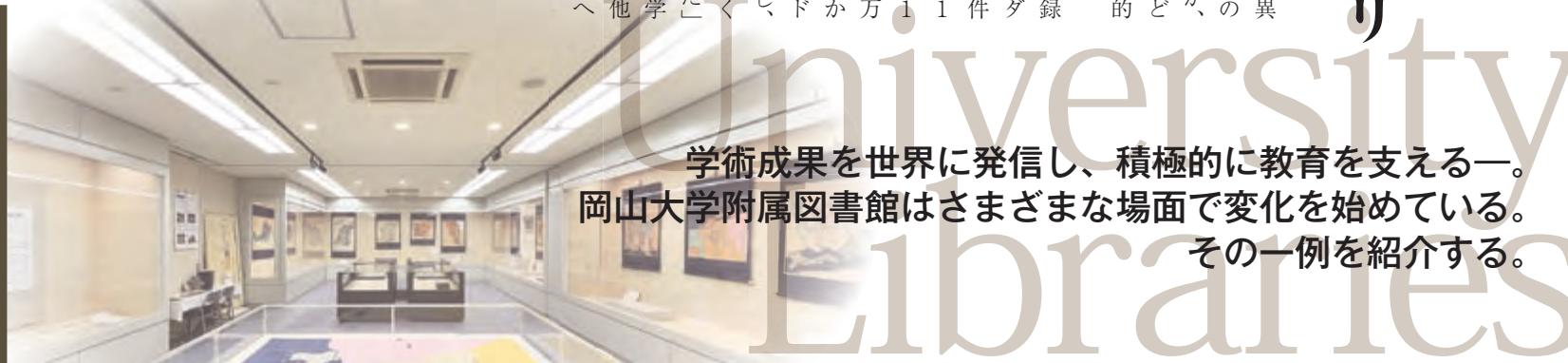


◀グループで学習する学生たち

附属図書館の職員の業務は本の貸し出し...と思っている学生は多いだろう。しかし図書館職員は司書資格を持つている人も多く、大学の学習を支える大きな力となる。附属図書館では毎年、新入生向けのオリエンテーションだけでなく、「資料の探し方」「データベースの使い方」などの内容で講習会を開催。学

年や専攻に即した講習会を提供している。学生の自主学習をサポートする場所の提供も充実中。パソコンなどの電子機器利用を一切禁止し静かに勉強できる「サイレントスペース」がある一方、

学習支える ヒト・バシヨ・モノ



学術成果を世界に発信し、積極的に教育を支える一。
岡山大学附属図書館はさまざまな場面で変化を始めている。
その一例を紹介する。

貴重資料守り 社会へ還元

大学附属図書館には貴重な資料を収集・保存するだけでなく、それを研究し成果を社会に還元する役割も求められる。

岡山大学附属図書館は、美作国勝山藩の藩政資料「三浦家文書」や古い医学書をコレクションした「古医書集成」(鹿田分館)、資源植物科学研究所の前身を創立した大原孫三郎氏が蒐集した「大原農書文庫」(植物研分館)など多数の貴重資料を所蔵。中でも特に有名なのが、江戸時代に岡山藩主だった池田家に伝わる文書や絵図を総数10万点以上集めた「池田家文庫」だ。戦災の中、奇跡的に焼け残った同文庫が、池田家の好意や大学設立期成会など市民の尽力で岡山大学に移管された経緯があり「社会へ還元する義務が課されている」とする附属図書館。約



▲池田家文庫こども向けワークショップ

3000点の絵図やマイクロ目録などをデータベース化しHP上で公開しているほか、レプリカやデジタルデータなどの貸し出し、提供依頼にも積極的に対応する。

また岡山シティミュージアムで毎年「池田家文庫絵図展」を開催し、一般の人が貴重資料に触れる機会を提供。絵図を手に岡山の街を歩く企画は、毎回多くの歴史ファンが詰めかける人気企画となっているほか、教育学部学生が案内役となり小中学生とともに後楽園を探索する「池田家文庫こども向けワークショップ」を開催するなど、資料を活用して社会とのつながりを深めている。

研究成果集積し世界へ公開 岡山大学学術成果リポジトリ

大学の教育研究成果を社会に還元することが求められている今、学術情報を積極的に情報発信する必要性が年々高まっている。その役割の一翼を担う存在が附属図書館だ。

岡山大学附属図書館では、学術論文など学内の研究成果を集積しインターネットを通じて無償公開するサービス「岡山大学学術成果リポジトリ」を2006年度から運用開始。当初は紀要などを中心に登録を進めていたが、登録件数拡大に向け2011年度11月から学位論文(博士)と学内プロジェクトの研究成果の無償公開を原則義務化。グループや国立国会図書館サーチなどからも検索・アクセス



が可能なため、従来とは異なる他分野の研究者や一般の人の利用、被引用の機会が増えるほか、永続的にデジタル保存できるなどの多くのメリットがあり、積極的な登録を学内に呼びかけている。

2013年1月末現在で登録件数は3万1193件。全文ダウンロード件数は71万5339件(2012年4月〜2013年1月)で、既に昨年度1年間(2011年4月〜2012年3月)を10万件以上上回っている。中には1か月で1500件以上ダウンロードされる論文も。「メリットを感じ、論文を発表するたびに登録してくれる先生も少しずつ増えてきた」(附属図書館)という。今後も大学



夢のぶどう求め続けて

天の恵んでくれた土地

ぶどう作りに最適な気候は日照時間が多く雨が少なく、日照が少ないと品質の向上が困難で、雨が多くなると病気が発生しやすくなります。岡山県はぶどうにとって、天の恵んでくれた土地です。

1989年、幸運にも皮ごと食べられる種無しぶどう「瀬戸ジャイアンツ」の完成にこぎ着けられました。これは食べやすさ、栽培しやすさの面から消費者と生産者が共に長年求めていた品種です。今では岡山県はもちろん、全国各地の農家で増殖が進み、微力ながらぶどう産地の発展に貢献できることに喜びを感じています。

貧しかった少年時代

私は農家に生まれ、早くに父と死別しました。少年期・青年期を過ごした当時は第二次大戦前後で、農家でも食べ物に困った時代です。農地改革で小農になったのに加え、父親の兄弟も終戦後一緒に暮らし始め、貧しい思いをしたため、幼いながらに食べ物の大切さが身に染みていました。そんな経験から農業高校を卒業して岡大農学部へ進学し、4年間果樹の研究室に在籍。農業一筋の道を歩む素地ができたわけです。卒業後は1年間の農業試験場果樹分場での研修を経て、高校の農業科教師になりました。

卒業生
その人に聞く

花澤 茂 HANAZAWA Shigeru

ぶどう研究家 × 岡山大学農学部卒

皮ごと食べられる種無し高級ぶどう「瀬戸ジャイアンツ」を完成させた。県立高校の農業科教諭を早期退職し、「花澤ぶどう研究所」を設立。瀬戸ジャイアンツのほかにもハイベリー、マスカットデュークアモーレなど7品種を確立。80歳を迎えてなお、ぶどう研究に意欲を燃やす。



瀬戸ジャイアンツ▶

- はなざわ しげる (80歳)
- ▶1932(昭和7)年 岡山県和気郡和気町出身
 - ▶1955(昭和30)年 岡山大学農学部卒
 - ▶1955(昭和30)年 岡山県立農業試験場(現:岡山県農林水産総合センター農業研究所)果樹分場で研修
 - ▶1956(昭和31)年 岡山県立高校農業科教諭
 - ▶1967(昭和42)年 農地取得、ぶどうの試作開始
 - ▶1989(平成元)年 岡山県立高校教諭退職
「瀬戸ジャイアンツ」品種登録
花澤ぶどう研究所設立
花澤ぶどう研究所顧問
 - ▶2013(平成25)年

ぶどう研究の道を志したのは、1960年頃にテラウエアや巨峰といったぶどうが市場に出現するようになったことがきっかけです。甘みの強さに加えテラウエアは種無しで食べやすく、巨峰は粒が大きく食べ応えがあり見た目が良いなどの理由で、急速に人気が高まりました。岡山県はぶどうの一大産地でしたが、当時の主力品種キャンベルが次第に押され気味に。教員をしながらも「キャンベルに代わる新たな品種が必要なのは」と感じ、様々な品種の情報を集めるようになりました。しかし納得できる品種は見つからず、「自分で研究し生み出すしかない」と痛感。現在の土地で新品種育成(育種)を始めたのです。

売れる品種作る努力

海外品種も集めるなど、がむしゃらに品種探しを行っていたとき、栽培仲間から日本の気候風土に適した品種を育種するようアドバイスを受けたのが決め手となり、ついに瀬戸ジャイアンツの交配(クザルカラ×ネオマスカット)にたどり着きました。日本に合いそうな品種のみに絞る、有利と考えられる多数の交配を行った結果でした。

現在流通しているぶどうは、長い年月の間に消費者ニーズなどに合わせ精選された系統です。た

だ、人気品種がいつまでも売れ続けるとは限りません。私は「従来品種を売る努力」より「売れる品種をつくる努力」が重要であるという信念を持ち、ぶどう作りを取り組んでいます。意外と思われるかもしれませんが、当初は瀬戸ジャイアンツも実が桃のような形をしている見た目の問題などから市場で相手にされませんでした。しかし今では、おいしいユニークな高級ぶどうとしての地位を確立しています。

さらなるぶどうの開発を

瀬戸ジャイアンツの品種登録とともに設立した花澤ぶどう研究所は、今年から息子に代表を譲り、私は育種をはじめ、農家の方への栽培指導や後継者養成に力を入れています。おいしいぶどうを作ることは農家にとって喜びとなり、私にとっても市場への供給体制が整う良さがあります。今は本音を語り合える仲間と一緒にスクラムを組んでやっています。交配時には予期しなかった、神の恵み。ともいうべき瀬戸ジャイアンツ。今後はそれにも負けない多くのぶどうを開発したいと思っています。日本の農業のノウハウや技術、農産物の品質は非常に優れています。研究の手を休めず、日本国内はもちろん世界の生食ぶどうの消費を広げられるようリードしていきたいです。

「高度な知の創成と的確な知の継承」——。岡山大学の理念のもとに教育・研究を展開する個性あふれる教員たち。研究室を訪ねる。

岡山大学産の白桃、ぶどうを使った「岡大農場」スイーツ



“岡山大学産”果物の魅力 スイーツで売り込む

岡山大学の実習用農場で育ったフルーツを使い、今年度から販売を開始した「岡大農場」ブランドのスイーツ。第1弾の白桃に続いて「ぶどう」の新商品も2013年2月から販売を開始するなど、岡山大学の土産としてだけでなく一般の人からの注目も高まっている。この人気商品を仕掛けた中心人物が、環境生命科学研究科（農）の舟橋弘晃教授だ。植物・農芸の専門家ではない舟橋教授がなぜスイーツ開発に取り組んだのか。開発の秘密と今後について聞いた。



▲商標登録した「岡大農場」のブランドロゴ

え、「動物系教員だから牛乳と岡山大学産果物を使ったアイスクリームを作りたい」と思いついた。アメリカ留学時代、大学構内で大学産牛乳を使ったアイスクリーム店が人気を集めていたことも頭にあり、提案してみたところ学部内から賛同の声が集まり、開発をスタートした。

年間通しアピール

元々、岡山大学産の白桃やピオーネなどは品質の良さや味わいで地域の人気が高かったが、販売できるのは1年間のうち限られたシーズンだけ。形が悪いだけで贈答用販売できなかったものを加工用に回すことで「年間通して岡山大学産果物の良さをアピールできる」と考えたという。実際に商品を製造する岡山県青果物販売協会の協力のもと、第1弾、2弾ともに半年以上試作を重ねた。

「甘いのが好きなので楽しんで開発している」と舟橋教授。試作品は農学部教員や事務職員、学生にも試食してもらい、率直な意見を商品に反映する。「農学部は女子学生も多くスイーツ開発には最適。食物や植物にもともと興味関心があるせい、シブianaな意見を言ってくれる学生も多い」という。当初のアイスクリームの夢から発展し、さまざまな失敗を重ねながら、白桃はジュレ、プリン、アイス、ぶどうはジュレ、ゼリー、アイスのそれぞれ3種が誕生した。

ブランドロゴは自筆

スイーツ開発と同時にブランド名の商標登録にも取り組んだ。「岡山大学の名前を全国に売り込

めるし、同一ブランドの商品のクオリティを保証することで、質の良い農産物を生産する意欲にもつながる」という思いのもと、国立大学らしく古風で硬派な雰囲気「岡大農場」という名称と、青空に白い雲が浮かぶ広大な農場をイメージしたデザインを採用。登録後はスイーツだけでなく農産物にもこのロゴを貼って販売し、徐々に認知度を高めているが、実はロゴの文字は舟橋教授の自筆。「イメージを伝えるためにさりと書いてみたら、そのまま採用されてしまっ」と舟橋教授は苦笑する。

第1弾の白桃ジュレは売り出してすぐに売切れるほどの人気に。販売場所も大学生協や岡山県内百貨店だけでなく、岡山空港、JR岡山駅でも販売されており、多くの人が手に取れるようになってきている。東京のイベント出品時にも人気を集め、「大学産商品のイメージを変えたくて、大学らしからぬ「少し高め」の値段設定が高級感を生み出したのかも」と分析。既に第3弾も検討中で「大学土産の枠を超え、街で愛される土産物にしていければ。大学と街の魅力を発信する商品にしていきたい」と語る舟橋教授。「もちろん専門分野にも力を入れて頑張りますよ」と念を押した。



舟橋 弘晃

環境生命科学研究科(農) 教授

FUNAHASHI Hiroaki (51歳)

- ▶1961年 滋賀県栗東市生まれ
- ▶1985年 岡山大学農学部 卒業
- ▶1987年 岡山大学大学院農学研究科修了
- ▶1987年 全国農業協同組合連合会飼料畜産中央研究所 研究員
- ▶1990年 岡山大学大学院自然科学研究科修了、学術博士(岡山大学)
- ▶1991年 米国ミズーリ大学コロンビア校農業食品自然資源学部 博士研究員
- ▶1994年 米国ミズーリ大学コロンビア校農業食品自然資源学部 研究専任助教授
- ▶1996年 岡山大学農学部 助教授
- ▶2000年 岡山大学大学院自然科学研究科 助教授
- ▶2007年 岡山大学大学院自然科学研究科 准教授
- ▶2008年~2011年 スペインムルシア大学獣医学部 非常勤講師
- ▶2011年 岡山大学大学院自然科学研究科 教授
- ▶2012年 岡山大学大学院環境生命科学研究科 教授(現在に至る)

角山 怜祐

工学部化学生命系学科2年
KAKUYAMA RYOSUKE

研究、スポーツ、趣味、特技……
学内外のさまざまな場面で活躍する岡大生たち。
そんなきらりと光る学生を、
同じ学生の目線から紹介する。



イベント開催から生活サポートまで 留学生支援ボランティア「WAWA」

1994年4月の創設以来、岡山大
学に在籍する外国人留学生のサポート
や交流を促進する活動を行う岡山大学
国際センター公認のボランティア団体
「WAWA」。春・秋にはウエルカムパ
ーティー、夏・冬はフェアウエルパー
ティーを主催することで、毎回多くの留学生
と日本人の賑わいを生み出し、親睦を
深める貴重な場として定着させている。
さらに活躍の舞台はイベント企画のみ
にとどまらない。大学が十分に提供す
ることのできないサービスを補完する
という意味合いから、来日留学生の受
け入れ支援、日本での日常生活を手助
けするチュートリアルサービス、留学
生やその家族に日本語を教える
日本語教室など多岐にわたる。
WAWAのスタッフは社会人
も含めて現在74人。25年度
に新たに入学してくる留
学生を受け入れ
るため、現
在も準備に
励んでいる。



▲ウエルカムパーティーを楽しむメンバーら

るうえで常に意識している事だ。
日本に留学してきて慣れない環
境や人間関係に不安を抱いてい
るため、自分が
思っていることは
全部言った方が相
手も安心するのだ
という。

角山さんは入学
当初からWAWA
の一員として活動
していたわけでは
ない。入学してす
ぐのサークル見学
で雰囲気になじ
めず、「このまま
では大学生活を
無駄にしてしま
う」と焦りを感じ
た。もともと留学への関心が強
かったため学内にある留学生と
の交流スペース「イングリッシュ
カフェ」に通うことに。そこで
WAWAの先輩たちと出会い、



▲留学生とお好み焼き作りに挑戦

留学生の不安やわらげ ともに楽しむ岡大ライフ

「留学生はテン
ションが高い人が
多く、一緒にいる
のもWAWAの魅
力といえる点だ。
」
「留学生はメン
バーとして活動
しているから乗
り越えていったと
いう。
これまでで一番
印象深い活動は、
サプリーダーとし
て初めて主体的に
携わった2012
年4月のウエルカ
ムパーティー。同級生5人が主
となり計画を進め、ポスターの
掲示や留学生会館へのビラ配布、
フェイスブックを利用した呼び
かけなど懸命に広報活動に走り

「思ってい
ることは全て
口に出して表
現するよう
にしている」。
WAWAの
リーダー角山
怜祐さん(工
学部2年)が
留学生とコ
ミュニケー
ションをと
るうえで常に意識している事だ。
日本に留学してきて慣れない環
境や人間関係に不安を抱いてい
るため、自分が
思っていることは
全部言った方が相
手も安心するのだ
という。

「思ってい
ることは全て
口に出して表
現するよう
にしている」。
WAWAの
リーダー角山
怜祐さん(工
学部2年)が
留学生とコ
ミュニケー
ションをと
るうえで常に意識している事だ。
日本に留学してきて慣れない環
境や人間関係に不安を抱いてい
るため、自分が
思っていることは
全部言った方が相
手も安心するのだ
という。



インタビュー
岡山大学学生広報スタッフ
法学部法学科3年
安松 佳祐

TOPICS 1

光合成研究で 世界に誇る成果

沈建仁教授が朝日賞受賞



朝日賞を受賞し記念の銅像を掲げる沈教授 (写真提供 朝日新聞社)

岡山大学大学院自然科学研究科(理)の沈建仁教授が、「光合成における水分解・酸素発生分子機構の解明」という功績を挙げたことが高く評価され、2012年度朝日賞に選ばれた。

朝日賞は公益財団法人朝日新聞文化財団が1929年に創設。学術・芸術などの分野で傑出した業績を挙げ、わが国の文化、社会の発展、向上に多大な貢献をされた個人または団体に贈られており、過去の受賞者には後にノーベル賞や文化勲章の受賞者も多く輩出している。

沈教授は長年にわたり光合成タンパク質の構造解析の研究を続けており、2011年には日本が世界に誇る大型放射光施設Spring-8を利用し、光合成において光エネルギーを利用して酸素を発生させる反応機構を解明。この研究成果は世界に大きな衝撃を与え、アメリカの国際科学雑誌Scienceのその年に得られた画期的な10の科学成果「Breakthrough of the Year 2011」にも選出される快挙を成し遂げた。



▲受賞記念スピーチを行う沈教授

1月31日に東京都内で行われた贈呈式には、ともに朝日賞を受賞した共同研究者の神谷信夫・大阪市立大学教授も出席。沈教授らは木村伊量・朝日新聞社代表取締役社長から目録と記念の銅像を贈られた。受賞記念スピーチを行った沈教授はこれまでの研究の苦労や面白さ、家族や周囲の人たちの支えに感謝を述べ、さらなる研究の推進を図りたいと今後の意気込みを語った。また贈呈式後の祝賀会では、お祝いに駆けつけた森田潔学長、許南浩企画・総務担当理事、山本進一研究担当理事らとともに受賞の喜びを分かち合った。



祝賀会に駆けつけた森田学長(左から2人目)らとともに(写真提供 朝日新聞社)

新理事紹介

北尾善信理事の辞任に伴い、2013年1月1日付で、門岡裕一氏(前文化庁文化芸術文化課文化活動振興室長)が財務・施設担当理事、事務局長に就任した。



門岡 裕一
KADOOKA Hirokazu

だれもが岡山大学で学びたい、岡山大学で働きたいと思えるような、キャンパスや職場の環境整備を進めたい。そのために、『美しい学都・岡山大学』というビジョンを踏まえた教職員・学生が一体感を持って取り組む行動計画やキャンペーン企画が必要。具体的に見える提案をしながら、共通理解と合意形成に努めたい。

かどおか ひろかず
九州大学職員、文部科学省大臣官房総務課課長補佐、文科省研究振興局振興企画課学術企画室長などを歴任。熊本県出身。

財務・施設担当理事 事務局長 The Message from Executive Director

千葉大学、新潟大学、金沢大学、長崎大学、熊本大学及び岡山大学の国立六大学は3月6日、六大学の特色を生かした連携を通じて教育・学術研究を機能強化し、グローバル人材育成推進や学術研究の高度化を図るため、包括的連携協定を締結した。このような広域にまたがる複数大学での連携協定は国立大学初となる。

岡山大学の森田学長が協定の趣旨を説明し、同大の荒木勝社会貢献・国際担当理事が国際連携機構の趣旨説明も行った。

また調印式に先がけて、ミャンマーのコー・コー・ウー科学技術大臣との懇談・意見交換も行われ、科学技術分野における六大学とミャンマーとの協力強化について確認書が交わされた。ミャンマーとの交流は、長崎大学を中心に工学系高等教育の人材育成支援について検討が行われてきたもので、今後六大学の国際化とグローバル人材育成をさらに推進していくことを確認した。

▲協定書に調印し握手を交わす森田学長(右から3人目)ら六大学学長



▲協定書に調印し握手を交わす森田学長(右から3人目)ら六大学学長

授業改善へ議論白熱

学生FDサミット開催

TOPICS 3



▲授業改善について議論する学生たち

岡山大学学生・教職員教育改善専門委員会は3月5、6日の2日間、大学教育の改善について学生目線で学び、考え、行動する「学生FDサミット2013春」を同大津島地区で開催した。全国40大学から学生や教員ら約300人が集まり、よりよい大学教育の形を求めて熱い議論を交わした。

FDとはファカルティー・ディベロップメントの略。教育力を高めるため、文科省によって大学のFDは義務化されており、全国の大学で授業評価アンケートなどが実施されている。同大では2001年度から学生をFDに参画させており、

全国でも先進的なモデル大学として知られている。

今回のサミットテーマは「考動せよ!学生FD」。初日は「岡山白熱教室」と題し、参加者全員で議論を展開。「授業をしない教員を認めるか」「大学教員に免許は必要か」「授業の出席点や宿題は必要か」などの議論テーマを設定し、それぞれの立場から白熱した意見を戦わせた。2日目は小グループに分かれて「しゃべり場」を開催。「学生FDとして何をすべきか、何ができるか」について話し合い、最終的に具体的な行動計画まで立案した。



▲協定書に調印し握手を交わす森田学長(右から3人目)ら六大学学長

国立六大学の連携強化へ 包括協定を締結

岡山大学のニュース&トピックスおよび最新情報は岡山大学のホームページからご覧いただけます。

<http://www.okayama-u.ac.jp>

12 December

6日 仕事と子育てを楽しむ「第2回 Family Meeting」を開催

10日 工学部創造工学センターの技術職員3人に「学長奨励賞」を授与

12日 岡山大学うるかむデーを開催。同時に、イルミネーションイベント「Okayama University Fantasy」が開かれ、25日までピーチユニオン周辺でイルミネーションを点灯



20日 定例記者発表を開催

27日 グローバル人材育成のあり方とキャリア形成について考える「高大連携フォーラム」を開催



1 January

1日 自然科学研究科の沈建仁教授が平成24年度朝日賞を受賞

3日 田中宏二エグゼクティブアドバイザーと自然科学研究科の沈建仁教授が、第71回山陽新聞賞を受賞



1

アフリカ地域の小学校教員など教育関係者が、本学教員の指導のもと初等理科教育を学ぶ2ヶ月間の研修を開始



9

16日 本学と国内9社が産学連携で共同研究に取り組む「酸化鉄太陽電池技術研究組合」を設立

大学院自然科学研究科の池田直教授が開発した酸化鉄化合物「ダリンフェライト」を用いた新しい太陽電池の実用化を目指し、本学と国内9社が産学連携で共同研究に取り組む「酸化鉄太陽電池技術研究組合」を設立。本学津島地区内にある「岡山大インキュベーター」で設立総会を開催。組合は2012年12月4日付で経済産業省から設立認可。池田教授がプロジェクトリーダーを務め、原価が安いグリーンフェライトの特性を生かした安価で高効率な酸化鉄太陽電池の早期開発に向け、素材開発を進めていく予定。福武総一郎・ベネッセホールディングス取締役会長と、戸田俊行・戸田工業代表取締役社長の2人が理事長に就き、本学の山本進一研究担当理事が理事を務める。



17

17日 日本人学生と留学生が交流するインターナショナルナイトを開催

17

優れた業績を挙げた若手研究者を顕彰する「岡山大学若手トップリサーチャー研究奨励費」に自然科学研究科の坂本浩隆准教授を選出し表彰

25

25日 インド国立コレラ及び腸管感染症研究所のインド人研究者が、山本理事らを表敬訪問



2

1日 卒業生フオローアップセミナーを東京で開催

8日 男性教職員のワークライフバランス向上を考える特別企画「育 Men's Club」を開催



15

15日 量子力学の基本原理として長年知られてきた「ハイゼンベルグの不確定性原理」を破る新事実を実験で証明したウーイン工科大の長谷川祐司博士が講演

21

21日 ポスドク・博士課程大学院生のための講演会・インターンシップ報告会を開催



21

21日 定例記者発表を開催

25・26

平成25年度個別学力検査等前期日程を実施

3 March

1日 異分野融合先端研究コア第一期生修了記念シンポジウムを開催

5・6日 全国の大学の学生・教員・職員の三者が一体となった大学教育の改善について考える学生FDサミット2013春「岡山サミット」を開催

6

6日 国立六大学間で包括連携に関する協定を締結

7

7日 前期日程の合格者を発表



研究・臨床成果

■異分野融合先端研究コアの守屋央朗准教授(特任)らの研究グループは、酵母がもつすべての遺伝子の「限界コピー数」を測定することに成功した。すべての遺伝子の限界コピー数が測定されたのは、あらゆる生物種で初めて。本研究の成果は、ダウン症候群やがんなど、染色体数の増加によって引き起こされる病態の解明に役立つと期待される。米科学誌 Genome Research オンライン速報版に掲載。(12月・臨時記者発表)

■大学院自然科学研究科の佐藤あやの准教授らの研究グループは、細胞内輸送のうち、律速段階と考えられている、COP1(コップ1)小胞による輸送の制御機構を解明した。今後本研究の成果を利用し、律速段階を完全にコントロールすることができれば、老化やストレスによる細胞内輸送の変化に役立つと期待される。米科学誌 PLOS ONE オンライン版に掲載。(1月・臨時記者発表)

■異分野融合先端研究コアの仁科勇太助教の研究グループは、グラファイト(黒鉛)から酸化グラフェンを合成する工程の時間短縮化に成功した。酸化グラフェンは、触媒、各種電池材料、大型ディスプレイなどへの応用が期待されており、今後大量生産技術の確立を目指すこととしている。(1月・臨時記者発表)

■大学院医歯薬学総合研究科の榎本秀一教授らと理化学研究所の研究グループは、溶液と固体の両方の状態で蛍光を発する有機蛍光色素「アミノベンゾヒナノキサントレン系(ABPX)色素」の発光メカニズムの解明に取り組み、ABPXが複数の分子構造へ瞬時に変化することで、カラフルな蛍光や発色を示すことを明らかにした。英国王立化学会誌 Physical Chemistry Chemical Physics に掲載され、同誌の Hot Article に選出された。(2月・臨時記者発表)

■大学院自然科学研究科の世良貴史教授、森友明研究員らの研究グループは、グループが開発した DNA を切る人工のハサミ(人工制限酵素)を用いて、標的ウイルスのゲノム DNA を切断することにより、ウイルスを不活性化することに成功した。この手法は、ゲノムが DNA からなるすべてのウイルスに適用可能で、DNA ウイルス感染によって引き起こされる様々な疾患の予防への応用が期待される。米科学誌 PLOS ONE オンライン版に掲載。(2月・臨時記者発表)

■大学院医歯薬学総合研究科の榎本秀一教授らと理化学研究所の研究グループは、細胞内の亜鉛濃度を制御している亜鉛トランスポーター「ZIP1」が、細胞外からの刺激に応じて、ゴルジ体から細胞質へ亜鉛を放出し、B細胞抗原受容体(BCR)のシグナル伝達を活性化させる重要な膜タンパク質であることを発見した。今回の成果は、亜鉛と免疫機能の関連の解明や細胞内シグナル伝達分子として働く亜鉛の詳細な機能、さらには亜鉛トランスポーターの機能不全に起因したさまざまな疾患に対する治療法の開発にも貢献することが期待できる。米科学誌 PLOS ONE オンライン版に掲載。(3月・臨時記者発表)

■大学院医歯薬学総合研究科の山田浩司准教授、竹居孝二教授の研究グループは、神経回路網の形成に必要な神経細胞の突起伸縮を制御する機構を発見した。今後、神経変性疾患の発症機序や脊髄損傷患者の神経回路再生機構の解明、その新規治療法への応用が期待される。米神経科学会雑誌 The Journal of Neuroscience に掲載。(3月・臨時記者発表)

年間後記

本 誌副編集長の林先生がこの3月でご転任になります。林先生と私は9年前にパトロンを受け継ぎました。それ以来、編集会議で幾度となく議論をさせていただきました。会議ではいつも冷静なご意見をいただけるので、私は安心して好き勝手なことを発言させていただいておりました。また、森田学長、SANA A 妹島先生・西沢先生との対談にご一緒させていただきました。この時も私の散漫な話の振り方を冷静に軌道修正していただき、無事特集記事として掲載することができました。林先生が編集から抜けるのは非常に残念ですが、ご卒業ですのて仕方がありません。この2年間お世話になりましたこと、厚く御礼を申し上げます。

本稿では、この2年を振り返る機会となりました。これまで編集会議で好き勝手な言い、実際に取材をして紙面を構成する総務・企画部企画・広報課の皆様にも多大なるご迷惑をおかけしております。この場をお借りしてお詫びと御礼を申し上げます。となく終わりの感じになっていきますし、ちょうど2年というキリの良いタイミングでもありません。その際も、でしうか。

工学部教授 ● 後藤 邦彰

い ちよう並木のリニューアルに合わせて、副編集長をお引き受けしたのが2年前でした。編集長の後藤先生や企画・広報課の皆様とともに、オシャレで充実した「いちよう並木」になることを目指して活動してまいりましたが、このたび、私が高田大学へ異動することになり、副編集長を終えさせていただくことになりました。この2年間、二度にわたる学長インタビュー、SANA Aのお二人へのインタビューといった貴重な機会をいただいたり、本学の優れた教育研究活動、地域貢献、在学生や卒業生のご活躍など数多く知ることができました。本学の素晴らしさをあらためて感じるとともに、「いちよう並木」の編集に携わることができた幸運を感じております。これもすべて、読者のみなさまからご支援いただき、様々なご意見やご感想を賜りましたおかげです。厚く御礼申し上げます。そして、2年間たいへんお世話になりました編集長の後藤先生と企画・広報課の皆様にご心より御礼申し上げます。岡山大学「いちよう並木」のますますの発展を祈念いたします。

教育学部准教授 ● 林 創

postscript by the editor

岡山大学生協同組合



読書好きの岡大生から注目を集めている企画があるのをご存知でしょうか。それは岡山大学生協が開催している「読書マラソン」。ただ本を読むだけでは得られない達成感を味わうことができ、本好きの輪が広がること間違いなし！多くの本に触れられる大学時代だからこそ、ぜひ挑戦してほしい企画です。

読書マラソンは、好きな本を読む感想や伝えたい内容を「POPカード」に記入、生協カウンターに提出するのが一連の流れ。岡山の学生なら誰でも参加できます。エントリーは簡単。マスカットユニオン1階ブックストアでエントリーカードを提出するだけ。エントリー時にはオリジナルブックカバー、1枚目のPOPカード提出時には書籍1冊5%オフ券をもらえるほか、POP提出ごとに押されるスタンプを10個集めればなんと電子マネー「momoca (モモカ)」に500円分のチャージがもらえます。

2012年度 BestPOP 賞 金賞受賞した POP カード▶

本好きの輪広がれ!! 読書マラソンに参加しよう

BestPOP 賞受賞作品の『名もなき毒』(宮部みゆき)



▲ POP を最も集めた『謎解きはディナーのあとで』(東川篤哉)、作家別では東野圭吾さんが最も人気を集めた

ジ！大学生にとって魅力的な特典が満載です。100冊達成者には金のしおりと認定証がプレゼントされ、「マラソン仲間」からは尊敬の的になるかも?!

2004年度から毎年開催しており、2012年度は94人が新たに参加し、計2,338枚のPOPカードが集まりました。毎年冬には教員や学生による「BestPOP賞」選考会も実施。2012年度金賞受賞者が「本」と次に読む人の架け橋となるよう「伝えること」を意識して書いた」と話すように、POPによって参加者が刺激し合い、新たな本との出会いを生み出しているようです。本好きの人はもちろん、読書は少し苦手...という人もぜひエントリーを。読書に親しむきっかけになるはずです。

読書マラソンに関するお問い合わせは岡山大学生協同組合ブックストア ☎ 086-256-4100 まで

